

23 経頸静脈的肝生検を施行した急性肝不全の組織学的検討

阿部 聡司・石川 達・小島 雄一
堀米 亮子・岩永 明人・佐野 知江
関 慶一・本間 照・吉田 俊明
西倉 健*・石原 法子*・根本 健夫**
武田 敬子**

済生会新潟第二病院消化器内科
同 病理検査科*
同 放射線科**

急性肝障害の診療においては重症化リスクを予測し、重症度に応じた対応が必要である。肝生検は成因診断に有用であるが肝細胞壊死の程度と急性肝不全の予後との相関の報告も散見されており、今回当院で発症早期に頸頸静脈的肝生検(TJLB)が施行された症例の重症度と組織所見を比較検討した。軽症急性肝障害15例、急性肝不全非昏睡型10例、昏睡型3例、移植/死亡例5例について肝細胞壊死、TUNEL陽性率を比較した。HE染色での肝細胞壊死を、壊死率<25, 26~50, 51~75, 76~100%に区分し、TUNEL染色では400倍視野での1視野あたりの陽性細胞数を計測した。HE染色での肝細胞壊死率は軽症急性肝障害で9/2/0/1、非昏睡型で5/2/3/0、昏睡型で1/0/1/1、死亡/移植で0/0/3/2であった。TUNEL陽性細胞は1視野あたり軽症急性肝障害/非昏睡型/昏睡型/死亡・移植で0.68/0.91/0.31/0.06であった。移植/死亡例、急性肝不全昏睡型において肝細胞壊死の程度が高度でTUNEL陽性率が低い傾向にあり、重症例ではapoptosisではなくnecrosisによる肝細胞壊死に陥っているものと推察された。肝細胞壊死が高度でTUNEL低値例に重症例が多く重症度予測に有用と考えられた。

24 肝外門脈瘤の1例

廣嶋 省太・和栗 暢生・大崎 暁彦
小川 雅裕・五十嵐俊三・佐藤 宗広
相場 恒男・米山 靖・古川 浩一
五十嵐健太郎

新潟市民病院消化器内科

症例は43歳、女性。右季肋部痛を主訴に撮影されたCTで脾静脈・上腸間膜静脈合流部から門脈本幹にかけて49.4mm大の門脈瘤が指摘された。疼痛は肋間神経痛様の体性痛であり、門脈瘤も当院での5年前、4年前のCT所見と比較してもサイズの変化はなかった。脾腫が見られたため、門脈血行動態について入院精査した。血管造影では門脈系の遠肝性側副路もなく、CTAP/CTHA・肝静脈造影でも特発性門脈圧亢進症に特徴的な所見はみられなかった。肝静脈楔入造影では肝静脈相互間吻合はみられず、逆行性門脈造影が十分にみられたことより、前類洞性ブロックはないと判断されたため、閉塞肝静脈圧10.2cmH₂Oが門脈圧と近似でき、門脈圧亢進状態はないと診断した。門脈瘤の成因としては先天的なものを考慮しているが、明らかでない。サイズが5年の経過で不変であること、瘤内に乱流や血栓のないこと、門脈圧亢進状態のないことなどを考慮して、定期的な経過観察の方針とした。肝外門脈瘤は稀な疾患であり、その成因や方針決定についての文献的考察を交えて報告する。

25 肝細胞癌に対するMiriplatin Balloon-TACE後単純CTとCone-Beam CTによるPixel値による仮想CT値の相関性の検討

石川 達・阿部 聡司・小島 雄一
堀米 亮子・佐野 知江・岩永 明人
関 慶一・本間 照・吉田 俊明

済生会新潟第二病院消化器内科

【目的】近年、IVR機器の発展開発により、Cone-Beam CTによる画像診断が可能となった。今回、われわれは肝細胞癌に対するMiriplatin